隣で引け目を感じるより…

「イケメン下手」の深層心理

イケメンは近寄りがたいし、どうも苦手という「イケメン下手」の女性は案外多い。カッコイイ男性を敬遠する、あまのじゃくな女性心理とは。

コメディアンの江頭2：50を思わせる、実年齢より10歳は老けて見える男性が、交際からわずか数カ月で、女優・竹内結子似の清楚系美人女性との結婚を決めた。

一方、身長180センチ、少年隊の東山紀之を思わせる醤油顔イケメンの男性は、10回以上お見合いを繰り返しているのに結婚にたどりつけない。一度は付き合っていた女性の両親に挨拶も済ませ、結婚寸前まで行ったのに、別の男性に彼女をかっさらわれた。外見だけを比べれば、ヒガシ似の男性の圧勝なのに、である。

以上の例は、東京都港区の結婚相談所、アルパ青山に最近訪れた相談者のケースだ。代表の小山礼子さんは言う。

イケメン＝努力不足

「イケメンより、容姿がイマイチの男性のほうがモテることは珍しくありません。女性は、経済力や知識量、人生経験値など様々な点で自分より上の男性を求めることが多い。だから容姿くらいは自分のほうが優位でいたい。女性の特権であるはずの外見の華やかさまで持っているような男性には、お返しするものがなくて引け目を感じるから近寄れない。釣り合いがとれる程度の容姿を求める女性がほとんどです」

時代の空気もイケメンにとって不利だ。震災を経験し、先行きの見えない不況が続く今、どんな危機でも乗り越える力強さや泥臭さこそ最も必要だと感じる女性は多い。そうした空気が広がる世の中では、泥臭さとはイメージがかけ離れた、洗練されたイケメンは敬遠されやすいのだという。

都内で働く独身女性(40)もイケメンは苦手だと話す。

「人生をかけて何かにがむしゃらに打ち込む姿にこそ男っぽさを感じるのに、外見が整いすぎていると必死さを感じない。与えられたものに胡坐(あぐら)をかいているような印象があるんです」

あくまでイメージに過ぎないのだが、「イケメン＝努力不足」と見えてしまうらしい。それに引き換え、過去に付き合っていた、ハッキリ言って不細工な男性からは、ものごとに必死に打ち込む姿が伝わってきた。

仕事帰りにデートで待ち合わせると、彼はオシャレなど気にする様子もなく、なりふりかまわず駆けつけてくれた。顔は疲れからさらに崩れて見えたが、それだけ仕事に没頭していたんだ、というエネルギーを感じることができた。

期待値というハンディ

「デートでは、仕事の話が特におもしろくて聴き入ってしまうことが多かった。外見の武骨さが仕事へのこだわりをより演出していたように思います」

女子は総じてイケメン好きかと思いきや、実はそうではない。男性陣は信じられないかもしれないが、イケメンが苦手という「イケメン下手(べた)」の女性は案外多いのだ。

結婚情報サービス大手のオーネットが、20代、30代の独身女性約450人に、結婚相手に望む条件を調査したところ、「容姿」は「価値観」「収入」「趣味」よりも下で、あまり重視されていないことがわかった。さらに、不況を反映して最近急増している「三平(さんぺい)女子」(平均的な収入、平凡な外見、平穏な性格を相手に望む女性)に限ると、「容姿」は「家事・育児能力」よりも下だった。

カッコイイ容姿はいまや、結婚の武器にはならないのだ。

「イケメンの受難」について、『東大卒でスミマセン』の著者、中本千晶さんは「東大卒の受難」と似ていると話す。

自身も東大卒の中本さんは、「東大卒のくせにアバウトすぎる」

「東大卒なのにこんなこともわからないのか」

など、「東大卒」であるがゆえにマイナス評価を受けた経験が多々あるという。

「イケメンも東大卒も、先入観で期待値が上がってしまうぶん、幻滅されることが多い。『ご期待に沿えずスミマセン』と感じることがよくあるんです」

確かに、冒頭の江頭2：50似の男性は、デート場所に小洒落たレストランを選んだだけで「見た目のわりにセンスがいい」と評価されたが、ヒガシ似のイケメンは、彼女の両親に挨拶に行った際、「見た目はいいけれど、話す内容が頼りない」と幻滅され、破局した。

両者の結婚相談に乗ってきた、前出の小山さんは言う。

「客観的に見れば2人の人間性に大きな差はない。それなのに結果に大きな差が出るのは、最初の評価が低いぶん、何でもプラスに見られやすい前者の男性に比べ、後者のイケメン男性は『期待値』という大きなハンディを背負っているからかもしれません」

ただ、イケメンの受難を指摘する前出の中本さんも、〝観賞用〟に限れば「イケメン好き」だという。『ヅカファン道』など宝塚歌劇に関する著書が4冊あるほどの宝塚好き。もちろんイケメン男役のファンだ。

「観賞するなら断然イケメンがいい。でも、リアルにいたら緊張して話せない。イケメンを堂々と彼氏にできるのは、『イケメンに釣り合う私』に自信が持てる女性だけ。容姿にも女子力にも自信がないごく普通の女性は、リアルにイケメン好きを表明するのは気恥ずかしい。イケメンは観賞専門という女性は多いのではないでしょうか」

コミュ力なければ(笑)

ジャニーズや韓流スターに代表されるように、「観賞用」イケメンは確かに人気だ。それなのに、「リアル」ではイケメンが苦手。このアンビバレントな女性心理を解析するのは、文化社会学が専門の辻泉・中央大学文学部准教授。

「芸能人のカッコよさは女子コミュニケーションの共通のネタとして盛り上がれる。一方、女性がリアルなイケメン男性に本気で入れ込む姿は、イタすぎて会話のネタにならない。ネタとして消費できないことは避けたいという心理が、女性の根底にあるのではないでしょうか」

観賞用のイケメンでさえ、いまや見た目がカッコイイだけでは人気が出ないとも、辻さんは言う。分岐点はSMAP。彼ら以降、カッコよさに加え、笑いのツボを押さえ、下ネタまで器用に操れる「コミュニケーション力」を持ち合わせていることが人気の条件となった。

今、突出した人気を誇る嵐は、メンバー5人のじゃれ合いを見ていたいと思わせるコミュ力が人気のカギになっている。韓流スターのチャン・グンソクも、ファンミーティングでは必ずおちゃらけコメントを言い、「イケメン」と「お笑いキャラ」を適度にミックスさせたことが抜群の人気につながっている、と辻さんは分析する。

「コミュ力万能時代の今、口下手でただカッコイイだけの男性は、女子の間では軽い笑いの対象である『イケメン(笑)』でしかなくなった」

大学3年の女性(20)にとって、イケメンといって思い出すのは、ミュージシャンのGACKT似の高校時代のクラスメート。周囲からは遠巻きに見られる存在で、よく話したこともないのに、ナルシストで話しにくいという印象が勝手に出来上がっていた。

「完璧な容姿が壁になって、距離を縮めることができませんでした」

偏狭な自己愛が増幅

実際、イケメンが近寄り難いオーラを発していることが多いのも事実だと指摘するのは、プロフェッショナル心理カウンセラーの浮世満理子さん。

「自分は愛されて当然だという自己愛が強いタイプがイケメンには多い。容姿は生まれつき与えられたもので、自分の努力で得たものではないので、健全な感情である自己肯定感にはならず、偏狭な自己愛が増幅されてしまう傾向もあるのです」

つまりイケメンにも、イケメンが苦手な女性にも、それぞれのコンプレックスからくる非常に複雑な心理が根底にあるのだ。

「イケメンはそれだけで人気」だった時代より、恋愛が高度で難しいものになっているのは、必然なのかもしれない。

編集部　木村恵子

illustration　小迎裕美子